

第4号

2015年
6月発行

CONTENTS

日本語の歴史的典籍の画像データ化とオープンサイエンス
九州大学名誉教授 有川 節夫 ①～③

近世日本を中心とする東アジアの理学典籍に関する国際共同研究
四日市大学教授 小川 東 ④～⑤

文書画像の認識と理解
公学はこたて未来大学准教授 寺沢 憲吾 ⑥～⑦

国際共同研究「江戸時代初期出版と学問の総合的研究」
国文学研究資料館准教授 海野 圭介 ⑧

国際共同研究「境界をめぐる文学―知のプラットフォーム構築をめざして―」
国文学研究資料館教授 齋藤 真麻理 ⑨

分野別画像収集「理学和算」
―東京理科大学下浦文庫―
古典籍共同研究事業センター特任准教授 金田 房子 ⑩

コラム「集古十種」―モノが語る歴史―
古典籍共同研究事業センター特任准教授 岩橋 清美 ⑪

トピックス ⑫

ふみ

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニユーズレター



大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

日本語の歴史的典籍の画像データ化と
オープンサイエンス

九州大学名誉教授 有川 節夫
ありかわ せつお

国文学研究資料館において、国内外の研究機関と連携した日本語の歴史的典籍に関する国際共同研究ネットワーク構築のための大型プロジェクトが始まったことは、関係の研究者だけでなく一般の市民にとっても大変意義深いことである。周知のとおりこのプロジェクトは、

広がりを持ち、同時に自然科学も含めた学際的な融合研究を誘発させることも目的にした新しいプロジェクトとして注目されている。

日本学術会議の「マスタープラン」を踏まえて、文部科学省が科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会に設けた「学術研究の大型プロジェクトに関する作業部会」で検討し、学術研究の大型プロジェクト推進に関する基本構想「ロードマップ」を定め、それに沿って可能な範囲で予算化し、展開される大型プロジェクトのひとつである。大型ということもあり、これまでに採択されたプロジェクトのほとんどは理工系のものであるが、国文学研究資料館を中心に展開される本プロジェクトは、人文社会科学では初めてのものです。国内だけでなく国際的な

本プロジェクトの目標は、「共同研究のネットワーク」の構築であり、その基礎基盤は、日本語の歴史的典籍約三十万点の画像データ化にある。したがって、そこに多くの精力と経費を必要とする。その作業を国文学研究資料館が中核になり、内外の拠点大学が連携協力して共同して行うことになる。この画像データベースができれば、既存の目録情報データベースと統合して、コンテンツとしての古典籍にも直接アクセスできるようになり、プロジェクトの計画に際して構想されたような様々な研究の深化や新たな融合研究に貢献することが期待される。それに加えて、歴史的典籍を利用する文学研究に、最近主に自然

科学分野等の実験系の研究を対象にして議論されている「オープンサイエンス」との関連においても、新しい研究の潮流を産み出すものと期待される。

古典籍の画像データ化も含めて学術情報の電子化については、日本では大学図書館を中心にして、取組んできた実績がある。一九九〇年代後半から、大学によっては文部科学省から電子図書館構築などの名目で特別な予算措置がなされた時期もあり、また、それを受けていない大学では自前で工夫して電子化を進めてきている。その中には、今西館長が九州大学で先駆的に実現した源氏物語などの画像データベースも含まれている。このような動きは全国の大学等に波及し、本プロジェクトの構想にも影響を与えたのではないかと思う。さらに、大型の事業としては、麻生内閣時代、国立国会図書館に補正予算が措置され、国立の図書館としては諸外国の後塵を拝していた同館における蔵書の電子化事業が一気に加速した。

一方、データベースの共同構築と共同利用に関しては、国立情報学研究所(NII)がその前身である学術情報センター(NACSIS)の時代から、全国の大学図書館と共同して構築してきた総合目録データベース(NACSISCAT)がある。この方式には、参加した図書館側にも自大学の目録データベース構築にかかる経費や労力を削減できるというメリットもある。さらに、共同利用という側面に関しては、JILという図書館間の資料の相互貸借サービスにも貢献し、Cinii BooksやWebcat Plusといった利用者個人への情報サービスにも繋げている。目録データベースに関するこの共同構築・共同利用の方式と運用実績は、不特定多数の研究者や市民から

のアクセス・利用という新たなデータのオープン化にも貢献しており、本大型プロジェクトにとっても、関連のある大規模事業の成功事例として参考になるであろう。

主観を反映した索引付けやタグ付け

このプロジェクトでは、目録データに関しては、既にしっかりと「目録情報データベース」が存在している。それらにコンテンツとしての古典籍を画像化し一体化してアクセスできるようにすることによって、本プロジェクトの計画にも記載されているように、研究の深化や異分野融合のプラットフォームとして機能することが期待される。それを可能にするために、また次節で述べるオープンサイエンスやシチズンサイエンスとの関係においても、個々の画像データへのタグ付けが非常に重要になる。一般の文献についてもそうであるが、索引付けやタグ付けは、検索だけでなく学術資料を特徴付け、カテゴライズするためにも重要である。索引付けに関しては、自動的な手法でもある程度可能であるが、異分野の研究者も含めて研究者間でも納得できる標準的なもの他に、分野固有の見方や研究者個人の主観を反映した自由な索引付けも重要である。同じ文献であっても、その評価や価値、分類は、研究者の主観ともいえる見方によって異なり、また、時代とともに変化する。他の著作物にも影響を受け、学界における評価によっても変化するものである。そうしてやがて一定の合意を得て、標準化され整理されるものである。そして、それをベースにしてまた新しい見方がでてくる。学問においてはこうしたプロセスが繰返されるのが常である。これと同じようなことが、本プロジェクトにおける画像データに対しても起こると考えるのは自然であろう。そこで、こう

したプロセスをシステムとして標準的に支援できるようにしておくことが望まれる。また、ネット社会の利点を活かして、Facebook等のSNSを介した同好会のようなものがいくつも自然発生的に生まれ、そこでのおしゃべりの中から研究レベルの議論へと発展することも期待される。

オープンサイエンスとしての意義

昨年(二〇一四年)の十二月から今年の三月までの比較的短期間であったが、内閣府が設置した「国際的動向を踏まえたオープンサイエンスに関する検討会」において、オープンサイエンスに関する施策等が集中して検討され、その結果が今年の三月に報告書としてとりまとめられた。この検討会設置の発端は、「国際的動向を踏まえた」という文言にも表れているように、最近、この概念に対する重要性が世界的に認識され、特に二〇一三年六月に開催されたG8の共同声明において言及され、世界的に議論が加速し始めたことにある。オープンサイエンスとは、研究成果としての学術論文やそれに使ったデータ、あるいは貴重な実験・観測データ等をオープンにし、それらを内外の研究者が相互に利用して新たな学術研究を展開し、イノベーションに繋げようとするものである。学術論文のオープン化とは、電子ジャーナルの価格上昇への対応策としても注目されてきたオープンアクセスのことであり、既に我が国でも実績を挙げている機関リポジトリなどもこの範疇に入る。

ここで注目したいのは、データのオープン化である。これは理系あるいは実験系の分野ではイメージしやすい。いわゆる実験・観測データを考えれば解りやすい。そこには、個人や研究室単位での小規模なものから、天文台や加速器施設、地震観測所、大学共同利用

機関法人の各研究所等が持つ大型の装置を使って得られる巨大なデータベースも含まれる。論文に使用したデータや議論の根拠となるデータがオープンにされることによって、関心ある研究者は公表された研究成果を継承・発展させること及び、研究成果の検証が可能になり、研究活動の透明性を高めるためにも役立つ。また、大規模の実験・観測装置は、極めて高価なため個々の研究機関で簡単に整備することはできない。そうした装置を有する研究機関で得られたデータについては、可能な限りオープンにし、国際的な共同利用に供されるべきである。実際、分野によってはそのようなことが既に実施されている。さらに、研究成果だけでなく、データがオープンになることによって、研究者だけでなく、多様な経験や価値観、視点、関心をもった一般市民がデータにアクセスできるようになり、いわゆるシチズンサイエンスを誘発し、意外性のある新しい発見も期待される。

本プロジェクトで取組む歴史的典籍のデータベース化には、こうしたオープンサイエンスやシチズンサイエンスの面からも大きな意義がある。また、生徒や学生、一般市民が学校や大学で教わり、学んできた様々な歴史的な事項に関して、そのオリジナル資料の画像を直接見ることができ、親しみが増し、より深い理解へ繋がる。市民や学生達によるそうした経験を通じて、国文学研究資料館の整備・充実・保存活動に対する理解と支持を広げていくことも、本プロジェクトのもたらす新たな可能性であり重要な意義であると思う。このような意味でも本プロジェクトの成功を期待したい。(ありかわせつお、前九州大学総長、古典籍共同研究事業センター顧問)

近世日本を中心とする東アジアの理學典籍に関する国際共同研究

四日市大学教授

小川 東

十七世紀から十九世紀にかけて日本では西洋とは独立して数学が急速に発展し、豊かな数学文化が出現した。たとえば江戸出版書肆（書物の出版や販売する店のこと）の開板（かいばん）（版木を彫って本を印刷すること）・販売許可の公的記録である『割印帳』によれば、宝暦年間から文化年間にかけて全体のおおよそ一パーセントから一・五パーセントが数学書だったことはその豊かさの証の一つである。『国書総目録』に日本語の歴史典籍として数学など理學典籍が多数含まれているのはその反映である。

世界数学史の中で見ると、近世日本の数学は非西洋起源の数学の中で最後に位置する。今から百五十年ほど前まで我々日本人は西洋数学をほとんど知らず、中国由来の数学を独自に発展させてきたのである。現代では数学は世界共通の言語と言われるが、異なる文化においては異なる数学が発展しうるということは刺激的な事実である。一方、明治以降の日本の西洋数学の受容には目覚ましいものがあり、五十年ほどで高木貞治に代表される日本の数学は世界第一線級の水準に到達した。その歴史的背景としての近世日本数学文化の研究は、それ自身魅力的な課題であると同時に、現代の科学技術政策を考える上でも有意義である。

このように、近世日本の数学の富饒な展開は世界的に見ても深い関心を呼ぶ可能性がある。しかしながら海外の研究者による研究は未だ僅少である。それにはもちろん種々の理由があるが、日本の研究者が海外に向けて積極的に発信してこなかったことも一因として挙げられよう。

このような状況を背景に本研究は提案され、採択された。本研究は八名の国内の分担者他と六名の海外の研究協力者からなる。海外の研究者の内、四名は中国の研究者であるが、それは日本の数学に関心を寄せている研究者が中国に多い現状を反映したものである。

初年度の平成二十六年度は三月六日（金）から九日（月）にかけて三重県の近鉄アクアヴィラ伊勢志摩において国際研究集会International Symposium on the History of Mathematics in East Asia (ISHMEA) を開催した。講演者は日本から七名、中国から六名、韓国から二名、台湾から一名の計十六名であった。冒頭に国文学研究資料館の金田房子氏による「国際共同研究ネットワーク構築事業」の紹介があり、参加者の耳目を惹いた。

本研究は平成二十九年九月までの三年計画である。具体的には、国際共同研究ネットワーク構築事業の一環として



筆者講演風景

講演は、関算近道流・法開堂清定が算額（数学の問題と答を絵馬のように仕立てたもの）を総持寺（現大阪府茨木市）に奉納するにあたり門人に寄付を募ったときの資料『奉額観世音菩薩』（嘉永七年、和算の館蔵）の紹介。本資料は算額の奉納に要する費用が概算できる貴重なものである。

以下の五項目を主な課題と捉えている。

(ア) 近世日本の数学書に現れた語彙の国語学的研究

(イ) 海外の研究者との共同研究

(ウ) 書名、術語の標準英訳を確定する研究

(エ) 重要理学典籍のテキスト化、現代語訳および英訳

(オ) 残存理学典籍の調査・研究

紙面の都合でここでは詳しく述べることができないが、別途報告書などで紹介する機会もあろうかと考えている。

金田特任准教授講演風景

講演のタイトルは "Outline of the Project to Build an International Collaborative Research Network on Pre-modern Japanese Texts"。国文学研究資料館の本構築事業の中に理学典籍が包含されたことは、これまでとくに交流のなかった国文学系研究者と数学系研究者との協働を示唆するものとして参加者の関心を惹いた。平成二十七年度もまた小規模ながら同様の国際研究集会を開催する予定であることから、両者のさらなる共同が進展することが期待されている。二十七年度は国文学研究資料館において開催する予定である。



文書画像の認識と理解

デジタル技術が文献・資料という知的資源の保存と共有に対してはすでに大きな成果を上げている一方で、デジタル化された文書画像データを十分に活用するための技術は、まだ発展途上段階にあるのが現状です。たとえば、大規模なデータベースから有益な知識を抽出する研究は現在盛んに行われていますが、画像データはテキストデータと異なり扱いづらい特性を持ったデータであるため、通常の方法ではそこから知識を取り出すことができません。ならば全文をテキスト化すればよいのかというと、膨大な文献・資料のすべてを専門家が一つ一つテキスト化するのには現段階でコスト的に現実的ではなく、一方で従来の自動文字認識技術(OCR)は万能ではなく、歴史的文書や手書き文書などには適用が困難でした。

なぜOCRは万能ではないのでしょうか。ここで図1をご覧ください。中央の字は、縦方向に見ると13、横方向

に見るとBと、多くの人が読むのではないのでしょうか。これは、人間は文字を個別に独立して読んでいるのではなく、前後の文脈から判断して理解しながら読んでいるということを表しています。読もうとする文献の性質が

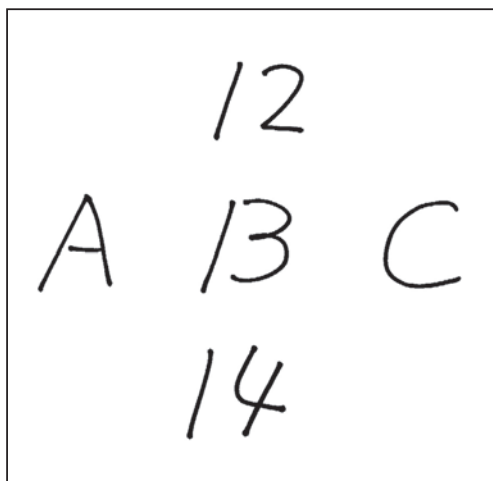


図1 同じ画像でも違う文字に見える

難しくなればなるほど、このような読み方が必要となっ
てきます。つまり、個々の文字を独立して認識する従来のOCRには限界があり、理解しながら認識する、とい

公立はこだて未来大学 准教授

寺沢 てらさわ

憲吾 けんご

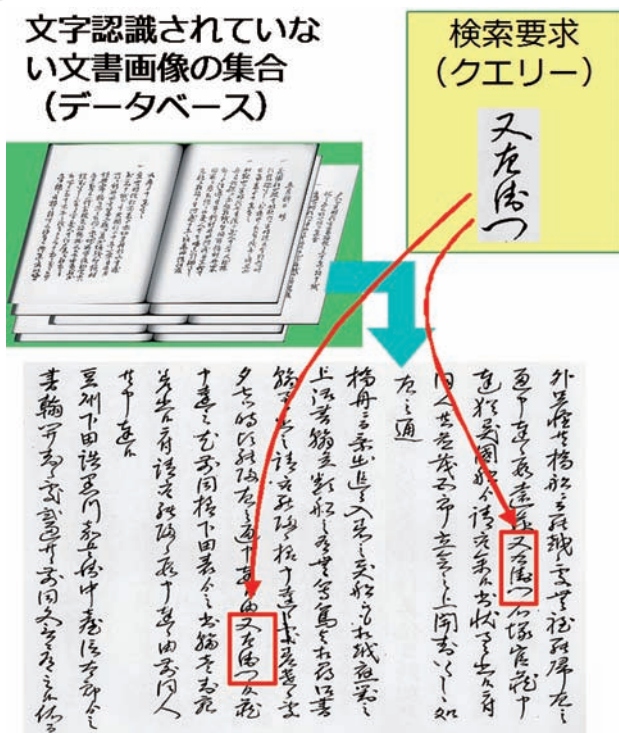


図2 画像だけでテキスト検索を行う

う、従来より一步進んだアプローチが求められるので
す。
本研究ではこうした背景をふまえ、文書画像データに
対し、テキストデータへの変換を経ることなく画像デー
タのまま適用可能な検索・知識抽出技術の開発を行って
きました。こうした技術を用いて、文書画像データベ
ースという宝の山の、さらなる有効利用を促進することを

目指しています。その成果の一部として、函館市中央図
書館所蔵の文書に対し、テキストではなく画像のまま
で全文検索ができる「文書画像検索システム」をウェブ
ページ (<http://records.c.fun.ac.jp>) で公開しています
(図2・3)。今回、国文研との共同研究を実施するにあ
たり、このシステムの適用範囲を拡張するとともに、全
文検索以外のさらに進んだ情報処理の研究を進めてい
く計画です。



図3 文書画像検索システム ウェブページ

国際共同研究「江戸時代初期出版と学問の総合的研究」

国文学研究資料館 准教授

海野 うんの

圭介 けいすけ

日本の書物文化の産物である古典籍についての研究は、日本国内に所蔵される資料を主な対象として研究が重ねられてきました。しかしながら、海外の図書館や博物館などにも多くの日本の古典籍が所蔵されており、その中には日本では既に失われてしまったものも含まれています。こうした在外資料に対する関心は近年とみに高まってきていますが、残念ながらいまだ十分に活用されていると言える状態にはありません。欧州、北米、韓国、台湾、中国などに伝えられた日本の古典籍の情報やその研究成果を日本国内における研究活動に接続することによって、日本の書物文化や印刷文化とその動態をより詳細に考えることが可能となります。

本研究は、既に国文学研究資料館のウェブサイトで発信されている欧州諸国に所蔵されている古典籍のデータベースである「コーニツキー版欧州日本古書総合目録」と国内に所蔵される古典籍のユニオンカタログ

である「日本古典籍総合目録データベース」、そして「所蔵和古書・マイクロ/デジタル目録データベース」によって公開されつつある日本国内に所蔵される古典籍の画像データを活用した国際的な共同研究として、日本の古典籍を所蔵する諸外国在住の研究者による在外資料の積極的な調査と検討を基盤とした日本の印刷文化に関する情報の発信と研究とを計画しています。

研究期間は二〇一五年度から二〇一七年度の三年で、ピーター・コーニツキー氏(ケンブリッジ大学)を研究代表者に、マティアス・ハイエク氏(パリ第七大学)、マイケル・エメリック氏(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)、金時徳氏(ソウル大学校奎章閣韓国学研究院)、陳明姿氏(国立台湾大学)、ジョシユア・モストウ氏(ブリテイッシュユ・コロンビア大学)、ジョセフ・キブルツ氏(フランス国立科学研究センター)、ミヒャエル・キンスキース氏(フランクフルト大学)、レベッカ・クレメ

ンツ氏(ケンブリッジ大学)、佐々木孝浩氏(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫)の各氏に、館内より野網摩利子、海野の二名が加わります。

Union Catalogue of Early Japanese Books in Europe コーニツキー版 欧州所在日本古書総合目録

Home - 欧州所在日本古書総合目録へようこそ

Home	本目録は、欧州各国の大学図書館・市立図書館・美術館・博物館等に所蔵されている、「日本の和装本」のすべてを掲載するものです。ここでの「日本の和装本」とは、(本本・原本)および(国書・和刻本漢籍・和刻本韓籍)を問わないこととします。
About this catalogue	本目録はまだすべてのデータを掲載しておらず、順次追加・更新を行なっています。詳細は About this catalogue をご覧下さい。
Explanation	This catalogue aims to include all the books bound in Japanese style held in the university libraries, local libraries, museums and other institutions of all European countries. It covers both manuscripts and printed books and both Japanese books and Japanese editions of Chinese and Korean books.
List of libraries	This catalogue is still far from complete and is being added to constantly. For further details click on About this catalogue .
Contact	
Search (検索画面)	・ 和漢書籍が所蔵されていない機関にみる
Images (画像一覧)	

おしらせ

2/Apr/14 List of libraries内 Details (各所蔵機関の詳細情報)の修正が完了しましたので、情報更新いたしました。

1/Aug/13 8月1日より、List of libraries内 Details (各所蔵機関の詳細情報)を、加重・修正のためのメンテナンス中とさせていただきます。

25/Mar/13 データの追加(572件)及び修正を行ないました。現在14318件です。

24/Sep/12 大英図書館所蔵書籍のデータ追加(90件)いたしました。現在、13746件です。

22/Mar/12 ケンブリッジ大学附属図書館所蔵の一部資料の画像の追加(24件)、データの追加(710件)及び修正を行ないました。現在13656件です。

14/Mar/12

国文学研究資料館トップ > 電子資料館 > 欧州所在日本古書総合目録

<http://base1.nijl.ac.jp/~oushu/>

国際共同研究「境界をめぐる文学

―知のプラットフォーム構築をめざして―

"Borders and Japanese Literature: Constructing a Platform of Knowledge"

国文学研究資料館教授

齋藤 真麻理さいとう まお

本研究は「歴史的典籍に関するプロジェクト」による国際共同研究として、二つのねらいのもとに計画されました。

第一は、海外研究者の協力を得て、日本文学をめぐる研究成果の国際的な共有を図ることです。近年、ウェブ上には次々に日本古典籍の情報が公開され、研究環境は飛躍的に向上し、国際的な学会等が国内外で開催されるようになりました。しかし、成果の発信はともすれば日本語に傾き、国際的に十分共有されない側面があります。一方で情報サイトが乱立し、信頼性の高い研究情報へのアクセスが危ぶまれるケースも少なくありません。

そこで本研究では国際的にも関心の高いテーマを選び、国内外の研究者の共同編集・執筆による英文オンライン・ジャーナルを創刊し、当館のウェブサイトから発信することとしました。誌上には国内外の研究動向を反映させ、メンバーによる研究論文の

ほか、学会誌等に掲載された書評や学界展望を含めた研究情報を英訳し、資料画像とともに掲載します。

第二は、国際的な共同運営により、国内外を横断する新たなネットワークを作ることです。当館では早くから国際研究集会等を開催し、多くの海外研究者との連携を深めてきました。その蓄積を踏まえて国内外の研究者と討議し、研究代表者にハルオ・シラネ氏（コロンビア大学）を迎えました。同氏発案のテーマ「境界」は国内外で高い関心を集めており、文学以外の分野からの知見も得られるため、国際共同研究にふさわしいと思われま

す。このように、本研究は最新の研究成果を集積しつつ、継続的な議論の場となる「知のプラットフォーム構築」をめざすもので、公益性の高い当館ならではの試みだと言えるでしょう。本プロジェクト事業の終了後は、ジャーナル編集は当館の事業として引き継

がれます。さまざまな特集号により、海外の日本文学研究の活性化や、若手研究者の養成にも寄与したいと考えています。

本研究は二〇一五年度から二〇一七年度にかけて行われます。研究組織にはケラー・キンブロー（コロラド大学ボルダー校）、クリステイナ・ラフィン（ブリティッシュコロンビア大学）、小池淳一（国立歴史民俗博物館）の諸氏が加わり、館内から小林健二、齋藤真麻理、海野圭介、恋田知子が参加します。研究会には異分野の研究者を招き、時間を掘り下げます。同時に、オンライン・ジャーナルについての調査研究を進め、発行に向けたノウハウを蓄積してゆきます。

創刊号（特集「境界」）は二〇一七年度に発信します。本研究が国内外の研究の裾野を広げ、国際協働の潮流を生む端緒となればと願っています。

分野別画像収集・理学（和算） — 東京理科大学下浦文庫 —

古典籍共同研究事業センター
特任准教授

あなた
ふさこ
金田 房子

近頃、和算を題材にした小説が話題になっています。遠藤寛子著『算法少女』（ちくま学芸文庫）は、もとは安永四年（一七七五）に刊行された同じ題名の著をもとにした小説です。コミックにもなりました。沖方丁著『天地明察』（角川書店）は映画にもなりました。これらの中にも描かれています。和算は、難問に挑戦して成果を競う（かなり高度な！）娯楽でもありません。その成果は算額として寺社に掲げてお披露目されたりもしました。

商売や測量に欠かせない実学としての和算は、虚の（すぐに生活には役立たない）学問として高度化し、方程式もあれば円周率の計算もされました。地方の素封家の文庫には熱心に算法を学んだことがわかる資料がたくさん残っています。広く草の根に広がっていたこのような数学の下地が明治の近代化に大いに役に立ったのです。

さて、下浦文庫は、平成十二年に四十二歳の若さで早世された下浦康邦氏が蒐集されたもので、和算書を中心に天文・暦学書、医学書、そしてこれらに付随する草稿や書簡を含む約一五〇〇点のコレクションです。平成十三年に国文学研究資料館に寄託され（和田恭幸「下浦文庫調査目録」〔『調査研究報告』二十一 平成十三年十一月〕）、翌十四年、東京理科大学近代科学資料館に収蔵されました。

この下浦文庫の和算書を、所蔵者のご許可をいただいて、画像公開致します。

コレクションの中で注目されるものをあげますと、『塵劫記』の諸版本はもとよりのこと、最上流二伝斎藤尚善の旧蔵書籍、碧山遺書は、最上流の研究に欠かせません。また、上州の遊歴算法家剣持章行の自筆稿本類も算法書出版の様子わかる貴重なものです。（参考：小林達彦「下浦文庫の科学史研究上の意義について」〔『数理解析研究所講究録』一三二七 平成十五年〕）

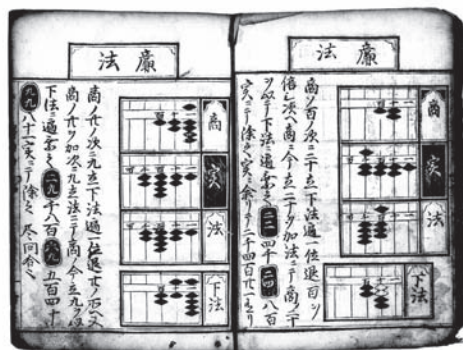
他に、和算書のコレクションとして知られる東北大学狩野文庫の画像も順次公開してまいります。

先日、国際共同シンポジウムISHMEMA（本号・小川先生稿参照）に参加したところ、和算に対する海外からの関心の高さを感じました。専門的知識を持ちながらも本を見に行くことの難しいこのような方々、そして小説や入門書を通して興味を持たれた方々にも、当プロジェクトで構築されてゆく和算書の一大画像データベースは大いに役立てていただけるものと自負しております。

そして、四日市大学関孝和数学研究所の上野健爾先生、小川東先生、電気通信大学の佐藤賢一先生をはじめ和算研究者の方々のご協力をいただき、共同でタグ（検索のための見出し）付けが進められてゆきますので、今後さらに様々なアプローチが可能になります。私たちの祖先の頭脳の切れに感嘆させられる和算の世界が、画像データベースという新しいツールによってさらなる未来へと展開してゆくことが期待されます。



算額（渋谷金王八幡宮）



『新編塵劫記』（下浦文庫蔵）

コラム 集古十種—「モノ」が語る歴史—

「白河の清き流れに魚住まず濁れる田沼今は恋しき」、江戸時代三大改革の一つ、寛政の改革に挑んだ老中松平定信を皮肉った落首である。定信の政治家としての活動は、日本史の教科書にもあるように、七分積金や人足寄場の設置などがよく知られているところである。しかし、この松平定信という人物、庭園をつくって庶民に開放したり、和歌を詠んだり、絵巻物を集めたりと、実は多才で、趣味人でもあった。今回、御紹介する『集古十種』には、このような定信の教養と趣味が余すところなく表われている。

この書物は、タイトルが示すように、古画や武器、古鏡、楽器、印章、碑文など、全国の由緒ある古いものを集めて写し、木版印刷したものである。今でいうところの文化財カタログであろうか。『集古十種』に掲載されている古物には、現在、失われているものや劣化が進んでいるものも少なくない。文化財の保存を考えるうえでも貴重な書物と言えよう。

本書は十年近い歳月をかけて編纂され、儒学者広瀬典や絵師谷文晁などの文人たちが関わった。全八十五冊におよぶ膨大な内容は、「古い物好き」というにはとどまらない感がある。では、なぜ、年月と労力をかけてこのような書物をつくったのであろうか。

『集古十種』が一応の完成を見た十九世紀初頭は、古物収集熱が高まった時代でもあった。収集家たちは地道な実地調査を続けながら、古いものから何かを学び、知識を仲間たちと共有し、時には地域の歴史を掘り起こして新たな名所を創り出したりもした。まさに歴史ブームの幕開けだったのである。

写真は東京都青梅市にある武蔵御嶽神社に伝わる国宝、赤糸威大鎧(あかいとおどしのおおよろい)である。この鎧は、広島県の厳島神社所蔵の鎧と並ぶ数少ない平安期のもので、すでに江戸時代から武具考証家の注目を集めていた。享保十二年(一七二七)には、八代將軍徳川吉宗が上覧している。吉宗は、この鎧が名品にもかかわらず、長年の保存環境が災いして痛みが激しいことを惜しみ、補修を施した。吉宗は由緒ある武具を見るのが好きな人で、大名家や寺社など、あち

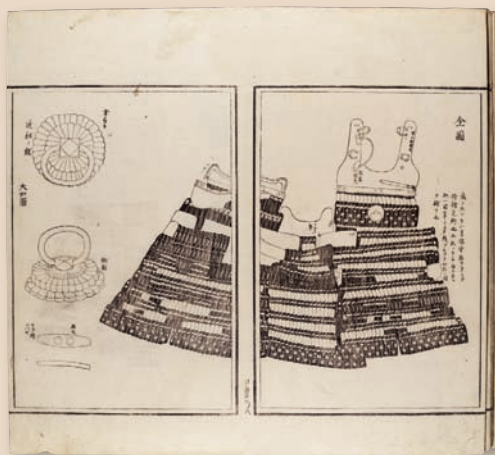


武蔵御嶽神社所蔵
国宝 赤糸威大鎧(複製)

こちらから江戸城へ運ばせていた。ちなみに定信は吉宗の子、田安宗武の七男であるから、吉宗の孫になる。

赤糸威大鎧は、將軍の上覧によって人々の関心を集め、「厄除けの鎧」として知られるところとなった。武蔵御嶽神社では、この鎧を中心にした縁起をつくり、開帳では神宝として飾った。まさに將軍の上覧が新たな神社の歴史を創り出したと言えよう。

『集古十種』には、実は、こうした各地の歴史や文化が詰まった「お宝」が多く伝えられている。皆さんもぜひ「地元のお宝」を探してみたいかがあろうか。



『集古十種』より
国文学研究資料館蔵 請求番号:ラ-3-5-20

シンポジウム開催（当センター主催・共催）

◆国際日本学シンポジウム「日本化する法華経」

〔日時〕平成二十七（二〇一五）年七月四日（土）十三時〇〇分～十六時三〇分
五日（日） 十時三〇分～十六時三〇分

〔会場〕お茶の水女子大学 理学部三号館七〇一教室

（東京都文京区大塚二―一―）

〔主催〕お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター

<http://www.cf.ocha.ac.jp/ccjs/symposia/symposia.html>

◆公開シンポジウム「日本語の歴史的典籍データベースが切り拓く研究の未来」

〔日時〕平成二十七（二〇一五）年七月二十五日（土）十三時三〇分～十七時〇〇分

〔会場〕日本学術会議 講堂

（東京都港区六本木七―二―三四）

〔主催〕日本学術会議 言語・文学委員会、科学と日本語分科会、

古典文化と言語分科会、文化の邂逅と言語分科会

<http://www.scj.go.jp/ja/event/index.html>

◆第一回 日本語の歴史的典籍国際研究集会「可能性としての日本古典籍」

〔日時〕平成二十七（二〇一五）年七月三十一日（金）十三時三〇分～十七時〇〇分
八月 一日（土） 十時三〇分～十七時十五分

〔会場〕国文学研究資料館 大会議室

（東京都立川市緑町十一―二）

〔主催〕人間文化研究機構国文学研究資料館

■ニューズレター名称変更のお知らせ

日本学術会議により認められ、提言された「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」は、「大規模学術フロンティア促進事業」として本格的な開始の運びとなったため、この進展状況を広くお知らせするため平成二十六（二〇一四）年六月に「ふみ」第一号を「古典籍共同研究事業センターニューズ」として発行し、以後十一月に第二号、平成二十七（二〇一五）年二月に第三号を発行してまいりました。今回この「ニューズレター」は、発行目的を冠した「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画ニューズレター」として「ふみ」第四号を発行する運びとなりました。

■係の設置

平成二十七（二〇一五）年四月一日付けで古典籍共同研究事業センター事務室に古典籍共同研究係を設置いたしました。

これにより、古典籍プロジェクトに係る国際共同研究ネットワークの構築や異分野融合研究の醸成等がより一層スムーズに進展できるよう邁進いたします。

ふみ 第5号は、
平成28（2016）年
1月発行予定です。

■表題の背景色は苗色。稲の苗のような淡い感じの緑色で夏の色として平安時代から使われ、天皇の側に仕える人々の服色に用いられました。

■本誌「ふみ」の各頁に使われている背景は「方丈記」（二二二年、鴨長明による日本中世文学の代表的な随筆）を江戸時代に本阿弥光悦流の書体で模刻し、古活字（嵯峨本）で出版したものであり、下絵は睡蓮・梅が枝・笹竹・高松・紅葉・兎・山端の満月等。当資料館の蔵本を利用しています。

ふみ

「日本語の歴史的典籍の
国際共同研究ネットワーク
構築計画」ニューズレター
第4号

〈発行日〉

平成二十七（二〇一五）年六月三十日

〈編集・発行〉

国文学研究資料館

古典籍共同研究事業センター

T 190-0014

東京都立川市緑町十一―三

T E L 050-5533-2988

F A X 042-526-8883

<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/>